

大原女

長唄

全詞章

枿屋六左衛門 作

変化舞踊「奉掛色浮世図画」の一

別題「黒木壳」「国入奴」

〔三下り・大原女〕 わしが在所は風雅にいでて、むくつけにねまるべいと、語らふならば、嬉し
甘露の桃や柿がぶらさがり

くじふくひき いぢわるざる
九十九疋の意地悪猿におったてられても笑はれても、ねこんず惚れたが性根ぢやへ、
黒木買はんせ黒木召せ

恋には八瀬の里育ち、軒の簾の床しさは、玉だれ髪を取上げて、誰に見せうとて夕化粧
わしが容貌は賞めもせで、姿のよいの生際が、宵の口舌に無理なひざりごと

わしほど優れた女子をば、嫌ふお前の気が知れぬ、嫌ふお前の気が知れぬ、機嫌なほして君と
我、俱におちよもの我が里

〔虫の音〕 兎角思ふようになア浮世がならば、可愛殿御と野の末までも、糸も繰ります
機織虫よ、誰を松虫焦れてすだく

つづれさせてふ馬追虫の、永き夜すがをなき明す、永き夜すがをなき明す、草葉にすだく
鈴虫の、ふるやふるのの

〔二上り・国入奴〕 振やれお振やれ剽軽男の、又とないたまたとないた一代奴、

ありゃんやありゃんや、こりゃんりゃこりゃんりゃ、何でもせ

国で評判男山

御国界の松の木、下り枝危い危い

お腰をかがめてお腰をかがめて

ふれやれふれやれ其の月雪や、花の槍見事にさ

ひらいてさ、見事にひらいて振もよし、ひかば靡かん松の木越よ、振るさ

振るさ別れ別れ、お先揃へて殿はしよちいり

〔掛け合い〕 だめな事ばし云はしやるな

翌は関東さへまかるべいちやなやれサテナ、主さ別れちやなア、

伊勢路へあんちうちくだぶんぬきやるさ、池のどん亀ならむぐるべいとはヤレサテ、

実だんべい実だんべい

いけすか女郎衆の旅立ちさ、主さ別れちやなア、伊勢路へあんちうちくだぶんぬきやるさ、

池のどん亀ならむんぐるべいとはヤレサテ、実だんべい実だんべい

〔結び〕 かけ奉る宝前に、名筆名画の徳は目前、今日の前に

外に中村人の歌右衛門